

ドイツ連邦共和国コトブス市における体操競技に関する報告

平塚卓也*・佐野智樹**・井上和佳奈***・樋口和真****

Report on Artistic gymnastics in Cottbus, Germany

HIRATSUKA Takuya*, SANO Tomoki**, INOUE Wakana*** and HIGUCHI Kazuma****

1. はじめに

本報告は、ドイツ連邦共和国ブランデンブルク州コトブス市における体操競技事情について、同市に所在する体操競技の強豪クラブ SC Cottbus Turnen e.V. (以下、SC Cottbus) 及びコトブス市において毎年開催されている体操競技の国際大会である Turnier der Meister の第 44 回大会について報告するものである。SC Cottbus には 2018 年 8 月 13 日から 15 日の 3 日間にわたって訪問し、練習の見学、クラブ関係者へのヒアリング調査を実施した^{注1)}。Turnier der Meister には 2019 年 11 月 21 日から 24 日にかけて参加又は観戦した^{注2)}。

2. SC Cottbus Turnen e.V.

SC Cottbus についてクラブの概要、指導場面、クラブ運営の 3 点から報告する。

2-1. クラブの概要

SC Cottbus はブランデンブルク州コトブス市のスポーツセンター (Sportzentrum) の一角に位置している。同スポーツセンターは体操競技場、陸上競技場、サッカー場、競輪場、宿泊施設などを有するブランデンブルク州でも有数のスポーツ施設であり、同州の強化拠点となっている。SC Cottbus はドイツの体操競技リーグ (Deutsche-Turnliga) の 1 部リーグに所属し、同リーグで 9 度の優勝を誇るドイツにおける体操競技の強豪クラブの 1 つであり、フィリップ・ボイ^{注3)}をはじめとしてオリンピック選手も輩出している。また、シニア用とジュニア用の隣

接した 2 つの体操競技場を有しており、施設の面においても充実したクラブである。SC Cottbus の競技部門は体操競技部門とトランポリン部門に分かれて活動が行われている。体操競技部門は男子のみであり、5 歳から成人のトップチームまで 6 グループに分かれて練習が行われていた。体操競技部門は 1 グループあたり 6 人から 10 人程度で構成されており、年齢が低い方のグループには 1 グループに 2 人や 3 人の指導者が付いており、充実した指導体制であった。

2-2. 指導場面

次に、練習観察の結果から指導場面における特徴的な点を 2 点あげたい。第 1 に、指導者によって積極的な補助が行われていたことである (図 1)。



図 1 補助の様子

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科/環太平洋大学
Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba / International Pacific University

** 筑波大学大学院人間総合科学研究科/福岡大学
Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba / Fukuoka University

* 北翔大学
Hokusho University

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科
Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

補助をすることによって、選手1人ではできない動きを練習することができ、新しい運動感覚の習得に役立つ。補助の仕方参考になるとともに、補助を行いやすいように練習器具に工夫を凝らしている点がよく参考になるものであった。この点はジュニア指導用に体操競技場が設計されていることが大きいと考えられる。

第2に、図2のような視覚情報による補助を用いた練習が行われていた。この時の練習はいわゆるサーキットトレーニングであるが、各所に①～⑤まで番号が示され、選手が次に行くべき場所がわかりやすく示されていた。

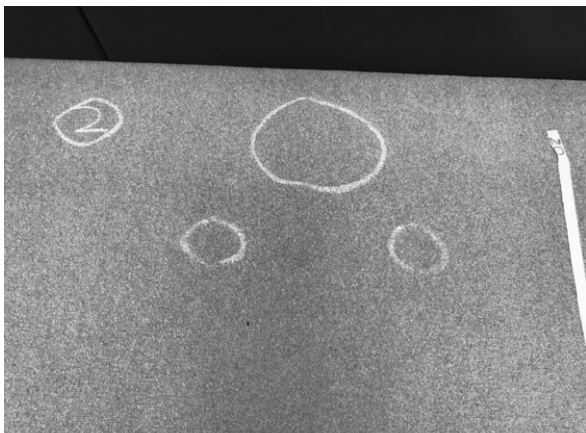


図2 視覚情報による補助

また、図2において番号のとなりに描かれた円は三点倒立の際に手と頭を着く場所を示したものである。このような視覚情報は年齢の低い選手を対象とした指導には非常に有効と考えられ、参考になる指導方法であった。とくに、その都度フロアに直接書き、使用後に再び消すことができるようになっていた点は興味深いものであった。

2-3. クラブ運営

クラブ運営について施設、指導者、資金及びドイツ体操競技リーグ(Deutsche-Turnliga)の4点についてクラブ関係者にヒアリングした。その結果、第1に、施設の建設にあたっては連邦政府、州政府、ドイツ体操連盟(DEUTCHER TURNER-BUND)から資金援助を受けているとのことであった。具体的な金額や比率については把握できなかったが、ドイツ体操連盟からの資金は一部にすぎないとの話であった。

第2に、専任の指導者は9人おり、そのうち3人はLausitzer Sportschule Cottbusの所属であり、他の6人はOlympiastützpunkt Brandenburgの所属であり、クラブと他の組織が連携して指導者を確保して

いることが明らかになった。日本においてスポーツ指導者がクラブ以外に所属している場合は、教育機関の教職員という形態が多く、その場合は教育機関での仕事が本務であり、それによって収入を得てスポーツ指導をボランティアに近い形として行っている。他方で、同クラブの指導者は他の組織に属してはいるもののスポーツ(体操競技)の指導が本務であるとのことであった。

第3に、資金については主に政府からの援助、会費収入及びスポンサー収入がクラブ運営に係る資金であるとのことであった。具体的な金額や比率については把握できなかったが、会費収入及びスポンサー収入が占める割合は小さいとのことであった。

第4に、ドイツ体操競技リーグ(Deutsche-Turnliga)についてであるが、日本においては体操競技のリーグは存在しないので、リーグ形式で体操競技の試合を行っているという点がよく特徴的である。また、同リーグではサッカーのブンデスリーガ同様に海外から強い選手を加入させて試合を行っているとのことであった。SC Cottbusはウクライナからイーゴリ・ラディビロフ選手^{注4)}を加入させている。SC Cottbusは指導者のうち2名がウクライナ出身者であり、ウクライナの体操界とパイプがあるとの話であった。

その他に、SC Cottbusは生涯スポーツの場としても機能していることについて述べたい。筆者らが訪問した時期においてはジュニアからトップチームの練習は夕方には終了し、夕方以降はクラブ会員である成人(高齢者を含む)が自由に練習を行っていた。

3. Turnier der Meister

Turnier der Meisterについて大会概要、第44回大会の詳細、大会運営上の特徴の3点から報告する。

3-1. 大会概要

Turnier der Meisterは、ブランデンブルク州コトブスにおいて40年以上も前から毎年開催されている国際大会である。2019年で44回目を迎えた同大会は、1993年までは個人総合選手権が行われていたものであり、翌1994年からは種目別選手権として行われるようになった。このような歴史あるTurnier der Meisterは、2018-2019年にかけての東京オリンピック種目別出場枠の選考会となる種目別ワールドカップシリーズ(Individual Apparatus World Cup Series)の一つに選ばれている。今回報告する2019年の第44回大会は、全8戦ある種目別ワールドカップシリーズのうちの第5戦目であった。

3-2. 第44回大会の詳細

第44回大会の競技日程は、2019年11月21日～11月24日であり、上述のスポーツセンター内に位置するラオジッツアリーナ（Lausitz Arena）において競技が実施された。

競技は、1日目と2日目に予選、3日目と4日目に決勝が行われた（いずれも男子3種目、女子2種目ずつ）。予選では、1班4名ずつに分けられており、本会場入場後一人30秒のウォーミングアップが設けられていた。決勝になると、種目毎に入場した後、一列に整列して選手紹介が行われ、ウォーミングアップなしで演技が行われた。あん馬と女子跳馬、つり輪と段違い平行棒、男子跳馬と平均台、平行棒と女子ゆかに関しては、男女交互に1人ずつ演技が行われていた。

特に今回はオリンピック選考が絡んでいるということもあり、リオデジャネイロオリンピックで個人総合銀メダルを獲得したウクライナのオレグ・ベルニャエフ選手を筆頭に、各国の種目別スペシャリストが集結していた。出場国は男女合わせて49か国、総出場者数194名であり、各種目の予選出場者はおおよそ30名から40名前後であった。日本からは、男子6名、女子5名の選手が参加していた^{注5)}。

また、器具に関してはSPIETH社製の製品が使用されていた。特に、鉄棒とつり輪にはFIGとSPIETHによる開発中のデジタルの張力計が取り付けられており、ボタン一つで瞬時に張力がわかるようになっていた。実際に多くの選手がこの張力計を使用しており、スムーズな競技進行に貢献していた。さらに、採点に関しては主任審判を補佐するスーパーバイザーが配置され、同大会の1か月前に行われた世界選手権での採点基準に沿うように工夫されていた。審判員の間に仕切りを立てて公平性を担保している部分などは、日本国内の大会ではみられない光景であった。

3-3. 大会運営上の特徴

Turnier der Meisterの大会運営上の特徴として2点あげたい。第1に、観客を退屈させない取組が各所に見られた。例えば、決勝の演技を終えた選手とコーチが得点を待つキス・アンド・クライのスペースが設けられ、その姿を会場の大型スクリーンに映し出すことで、選手たちの一喜一憂を観客も共有できるような工夫がなされていた。また、1種目の試合が終了後、すぐに表彰式に移るという形式で大会運営が行われていたが、試合終了後から表彰式への準備の間に新体操、アクロ体操、ダンスなどのパフォーマンスが実施されていた（図3）。観客がパ

フォーマンスに見入っている間に表彰式の準備が整っており、パフォーマンス終了後、すぐさま表彰式が開始された。



図3 合間のパフォーマンス

第2に、前述のSC Cottbusとの連携である。SC Cottbus所属のジュニア選手が各国のプラカードを持ったり、選手に付き添って入場したりしていた（図4）。さらに、前述のパフォーマンスとは別にSC Cottbus所属のジュニア選手による演技も披露された。



図4 試合運営に協力するSC Cottbus所属のジュニア選手

ジュニア選手にとっては各国の代表選手と間近で関わることや、出場選手と同様に大観衆の前で演技を披露することができ、忘れがたい経験になるとともに体操競技への愛着や意欲も高まることと思われる。また、ジュニア選手の保護者にとっても子どもの晴れ舞台を見ることができる絶好の機会となり、そうした点も集客に繋がっていると考えられる。

4. おわりに

2018年及び2019年の2度にわたって訪問できたことによって、平常時のクラブの活動と国際大会時の様子の双方を確認することができた。どちらの訪

間においても、クラブを発展させ、また、大会を44回にわたって実施してきた、Gym Cityと称することもあるコト布斯市において、体操競技が同市に根付いている様子を随所に確認することができた。国の制度、歴史及び文化等が異なることから、すぐさまに転用できるものではないが、日本におけるクラブ運営、体操競技の指導、大会運営等への示唆を得るものであった。本報告における知見が体操競技をはじめとするスポーツの発展に寄与すれば幸いである。最後に、2度の訪問にあたっては様々な関係者によるご支援を賜りました。ここにお礼申し上げます。

注

注1) 報告者のうち、平塚及び井上が2018年に筑

波大学海外武者修行支援プログラムの支援を受けて訪問した。

注2) 報告者のうち、佐野及び樋口が出場選手の所属先コーチとして試合に帯同した。また、当時、ミュンスター大学に滞在中であった平塚が現地を訪問し、観戦した。

注3) ドイツ代表として北京オリンピック及びロンドンオリンピックに出場した体操競技選手である。

注4) ウクライナ代表としてロンドンオリンピック及びリオデジャネイロオリンピックに出場した体操競技選手である。

注5) 同大会の試合結果については、日本体操協会の公式HPを参照 (<https://www.jpn-gym.or.jp/artistic/event/34272/>)。